私 の 後 悔

2023年
西九州伝道所
佐々木正明

序

私は１３年以上にわたって、フィリピン北部山岳地方に生活する、イゴロット族の間で宣教師とし活動しました。多くの方々と共に働き、共に苦労ができたことは、私の人生の宝であると感じています。とはいえ、すべてが良かったと思っているのではありません。あれから 30 年以上もたった今、思い返すと、足りなかったこと、不十分だったことがたくさんあり、臍を噛む思いもあります。そういう後悔の中で最大のものは、イゴロットの宗教感覚、神観についてしっかりと学ぼうとしなかったことです。自分が教えられ、信じてきたとおりのことを、私は宣教師の熱心をっもって一方的に語り続け、イゴロットの思い、イゴロットの感覚をあまり理解しようとは、していなかったのです。

イゴロットの宗教行事・カンニャオ

普通、イゴロットの宗教と言うと、カンニャオとそれに関わる死者との関係が取り上げられます。そして、カンニャオは異教の祭りであり、偶像礼拝である。それは私たちの神様が憎む、穢れたものであり、忌むべきものであると言われていました。少なくても私たちの教会では、長い間そのように教えられてきたものです。それで、カンニャオをすることはもちろん、それに参加することも協力することも、罪として取り扱われてきました。言い方によれば、クリスチャンとはカンニャオをしなくなった人たちと、思われてさえいたのです。

一方、私の中には常に、カンニャオははたして、宗教儀式だろうかという疑問がありました。確かに、カンニャオには宗教的な側面もありますが、いろいろ聞いたことをつなぎ合わせても、宗教と断定するには不十分だと思われます。それは宗教行事というよりも、イゴロットの死生観、世界観、そして民族としての共同体意識の現れと、理解した方がより正確です。ましてや偶像礼拝と断定し、排斥して忌み嫌うのは誤りではないかと、感じていたのです。

イゴロットの世界観では、現世と来世は何らかの形でつながったものです。その意味では、日本人の通俗的世界観と、大きな差はありません。イゴロットの間では、現世での怪我や病、あるいは不幸や不吉な出来事は、死者からの不満の伝言と理解されます。身内の死者の誰かが、向こうの世界の生活に不満を感じ、それを、現世に生きる親族に解決してもらいたいと願って、それらのことを起こすのだというのです。それで、この世に生きる人はカンニャオを催して、来世に生きる親族を慰め、不満を和らげてあげるのです。

カンニャオでは、不幸や災いの兆候があった家族が、何頭かの豚を殺して調理し、たくさんのご飯を準備します。お金に余裕があったり、不幸や災いの兆候が大きかったりすると、より多くの豚が犠牲として奉げられ、他にも牛や水牛、山羊や鶏、さらに犬までもお供させられます。そのほか、濁酒が振る舞われ、いろいろな果物も出されます。カンニャオをするかしないかは、単に家族の決定によるのではなく、ほとんどの場合、シャーマンの役割も兼ねる、土地の長老の判断によって決定されます。また、その犠牲がどれほどのものかも、殺された豚が犠牲として受け入れられたかという判断も、長老によって行われるのが通常です。長老は殺された豚の肝臓の形態をみて、それを判断するそうです。それで場合によっては長老の言葉によって、非常に多くの犠牲が奉げられ、何日も何日も続くことになるのです。カンニャオを催す家族の負担はとても大きなものです。

カンニャオで殺される豚は特別な意味を持っているらしく、必ず黒豚でなければなりません。黒豚は白豚に比べると二回りほど小型で、成長も遅く高価ですが、よりおいしいと言われています。ちなみにフィリピンでは茶色や斑の豚は見たことがありません。もしもこのカンニャオの時に白豚が殺されたとしても、それは人々へのもてなしの為であり、他の動物がそうであるように、カンニャオのための正式の犠牲には数えられません。また正式な豚を殺す時には、決して金属製の刃物を用いません。ベンゲット松が老成して赤くヤニが溜まり、非常に硬くなった部分を鋭く削って槍の穂先の様にして、四つ足を縛り付けられ、屈強な男たちに押さえつけられた豚の心臓を突き抜くのです。上手な男がやると一突きで決まるのですが、へたくそがやるとなかなか心臓を突けず、けたたましい豚の悲鳴と男たちの怒声とで、それはそれは、悲惨なことになりますが、それがイゴロットの人々にとっては、楽しいことらしいのです。日本人が１０ｋｇを超えるタイやブリを、生きたまままな板の上で裁き、魚たちが板の上で大暴れをするのを眺める、興奮にも似ていると言えるかもしれません。

このカンニャオには、家族親族はもちろんのこと、近所の人々はおろか、通りすがりの者、まったく見ず知らずの者でも、自由に参加し、一緒に飲み食いし、数日も留まることが出来ます。カンニャオでは時間の制限なしに、いつでも飲み食いし、参加者たちはあた

かも無礼講の様に大いに楽しみます。必ず行われるのは、輪になって歌い踊ることです。踊る者の多くは、男も女もブランケットをかぶり、手を広げて独特の振り付けで踊りますが、これは大きな鳥の姿を真似ているらしく、死者と聖者との間を取り持つ者の象徴らしいのです。歌を唄うこともあるらしいのですが、私は聞いたことがありません。個々の参加者が祈りを捧げる様な光景には出会ったことがありませんが、シャーマン役の長老がチャントを繰り返す姿は見たことがあります。また踊りのためには独特のリズムがあり、それがガングと呼ばれる真鍮製の銅鑼と、1 メートル以上もあると思われる長い胴を持つ、ソリバオという手打ち太鼓、それに日本でもよく用いられる、直径１５センチくらいの真鍮製の深いお皿のような、うるさい打楽器によって、二拍子、あるいは四拍子で、果てしなく続きます。ガングの取っ手は、人間の顎骨で作られたものが最高級品だと言われていますが、部族間の戦いが絶えた現在ではなかなか手に入らない代物で、私も一度しか見たことがありません。踊る者の中には、満腹感と濁酒と、長時間の踊りの疲れに酔って、恍惚状態になっている者も見られます。

大きなカンニャオには、数百人に及ぶと思われるほど、とても多くの人たちが集まってきます。山の峰に昇ると視界を妨げるものの無い山間の集落で、カンニャオの準備のために焚火をすると、その焚火は普通の焚き火とは規模が違います。それで人々は遠くから立ち昇る煙を見極めて、三々五々と集まってくるのです。丸一日くらい歩き続けてやっと到着するという人たちも、決して珍しくはありません。

カンニャオの社会的価値

現代の社会に生きて来た私たちには、一切の近代文明の産物から隔離され、何世紀も裸同然で満足に食べるものもなく、交通機関といえば時速４～５キロの自分の足以外には全くなく、数百メートルの高度差の山と谷をいくつも超え、険しい道をかき分けて行き交い、民族としての交流を保って来た人々の生活は、まさに想像を絶するものです。

このような社会において、カンニャオには非常に大きな社会的意義、あるいは機能があります。まず、普段は顔を合わせることがほとんどない人々が、一か所に集まって何日間も共に飲み食いし、踊り、楽しむことによって、部族としての共通感覚、いわゆるアイデンティティが強まります。これで、絆が生まれ、強まり、助け合う、協力し合うという感覚が確立されるのです。また、普段は会うことが出来ない人同士が情報を交換し合い、商談が行われ、嫁取り、婿取りの話も出来上がります。さらに、いつもはサツマイモとわずかの豆と貴重な米で飢えをしのぐ人たちが、豚肉、牛肉、水牛肉、山羊肉、鶏肉、犬肉とたくさんの肉を食べ、サツマイモもご飯もたらふく食べることが出来るカンニャオは、まさに栄養補給の大切な行事でもあるのです。米の貴重さは、現代の日本人には考えも及ば

ないでしょう。想像をはるかに超える物凄く急な斜面に、猫の額というよりネズミの額と言った方が良いような棚田で、雀の涙ほどしか生産されないのです。栄養失調でお腹が異常に膨らんでいる子供たちの多いこの社会に、カンニャオという栄養補給の社会行事は、昔、琉球を統一した尚巴志（ショウハシ）王が、栄養失調に陥りがちな民に、豚肉を食べる機会を増やそうと、祭りを推奨したという逸話に繋がるものです。

もう一つのカンニャオ

さてカンニャオとは、雑に定義すると、イゴロットの世界観と死生観から派生する、死者を慰め助けるために行われる、家族、親族、あるいは社会行事と言えます。これが西欧キリスト教の視点から見ると、偶像礼拝に当たり、クリスチャンたちは、絶対にそれを行ってはならないと、きつく教えられてきたものです。

しかしここに、表面に現れて来る行事としては、非常によく似ているというか、ほとんど同じでありながら、まったく意味の違うカンニャオがあることに、注意しなければなりません。それは先祖たちの要求とはまったく関りがなく、むしろ尚巴志王の志に通じる、貧しい食生活をしている人々の生活を支援する、社会的行事としてのカンニャオであり、表面的にはほとんど宗教的側面を持たないにもかかわらず、その実、イゴロット民族の崇高な神意識から発する、非常に宗教的な行事なのです。

イゴロットの神意識は、日本の神道にも通じるところがあって、その真髄は非常に崇高なものです。至高の神様を意識するがゆえに、この神様について詮索することは恐れ多いと感じて、イゴロットはこの神様についてあまり語りません。詮索しないできた、気高く尊い存在を、気高く尊いままに敬ってきたために、その神様について、ほとんど知識を持たないのです。私は興味をもって、この神様は、はたして創造神と理解されているのかどうか、幾度か集落の長たちに尋ねてみましたが、答えは「よくわからない」ということでした。多くの日本人が感じている尊く気高いお方について、まったく何も語らない神道の精神に良く似ているのです。ただたとえ良くわからなくても、またたとえあまり語られなくても、イゴロットの心にはこの神様の意識が強く残っているために、イゴロットの生活には何かにつけても、この神様がそっと顔をのぞかせるのです。日本人の中に微かに残っている「お天道様」の意識を、もっともっと強め、リアルな感覚にしたものに似ているでしょう。お天道様は、常に恵みと憐れみと正義をもって、私たちを見守っておられる至高のお方ですが、創造主とは見做されていません。

例えば１０以上もあるイゴロット族の中のカンカナイ族は、私たちの伝道の主な対象でしたが、彼らの多くが自分たちの手で穴を掘り、金槌とノミで金の鉱石を探り出し、それ

を粉になるまで砕き、火で焼いて金を採り出して生活をしています。この気が遠くなるような、長時間にわたる重労働の最後が、小さな素焼きの皿の上で、まだ混じり物の多い粉になった金を焼き溶かし、より純度の高い金を作り出すことです。そこで、その最後の作業を、近所の小さな女の子が物珍しそうに座って、最終段階まで眺めていたとしましょう。するとその作業を終えた屈強な男たちは、ただ見ていただけのその女の子にも、僅かながら、金を分けてやるのです。そのように気前よく恵んでやらなければ、目に見えない気高く気前の良い神様が、自分たちに恵みをほどこして下さらなくなると、言い伝えられているからです。イゴロットたちは、何からなにまで、そのような生活感覚を持って生きています。ですから、山岳民族のイゴロットは勤勉で、嘘は余りつかず、犯罪も少ないのです。怠け者が多く、嘘ばかりついて悪いことを平気でやってしまう、平地のカトリック文化に染まった民族とは、決定的に違うのです。教会の中での盗みも少なく、献金の額は貧しさに反比例して多く、たいていの牧師は、俗化したカトリック文化の平地の牧師よりは豊かに暮らしています。豊かに施す者は、目に見えない恵み豊かな神様いつも見られていて、たくさんの恵みを受けるのだと信じているために、信徒たちは惜しみなく捧げるのです。私たちの山岳地の教会と平地の教会を比べてみると、すぐにも分かる特徴です。

　このように人に施す精神文化、あるいは宗教文化を昔から持ち続けてきたイゴロットは、同じようにカンニャオと呼び、同じような祭りをしながらも、その意味はまったく別のカンニャオを行ってきたのです。それがもう一つのカンニャオです。そこにあるのは死者に対する恐れではなく、共に住む、より貧しい人々に対する思いやりです。それは次のように行われます。

「自分たちは恵み深い気高いお方に祝福されて、このように豊かになった。だから、この豊かさを他の人にも分けて、共に喜んでもらおうじゃないか。豚を殺し、たくさんの食べ物を準備し、誰にでも分け隔てなく食べてもらい、貧しい人たちのお腹も満たしてあげようではないか。そのように行うと、恵み豊かな神様は、なお一層、私たちを祝福してくださるのだから。

　残念ながら、聞き手のことはあまり考えもせず、ただ一方的に福音を語るように訓練されてきた私は、このカナンニャオについても、まじめに詳しく聞き出そうとしたことはありません。しかし大体、次のようなことを探り出しました。このカンニャオは、まず、3頭の黒豚を殺す小さなものから始まり、それを 7 回繰り返すまで行われます。繰り返すごとに豚の数は 5 頭、7 頭と増えていき、最後の 7 回目に至ると、大変な数になるとのことでした。奇数で増やされるので、最後は１５頭かなと想像したのですが、はっきりとしたことは聞き出せませんでした。もちろん豚の他にも、もう一つのカンニャオと同じように、たくさんの食べ物を準備しなければなりません。それはそれは大変な散財です。しかしそ

の散財は、自分で独り占めをするのではなく、恵み深い至高の神様の祝福を共に分け合うことであり、神様の恵みを多くの人に行き渡らせる、代行者となっているのです。少なくてもこのカンニャオをする者は、そのような意識を持って行うのです。もちろんそこには、誇りも自慢もないではないと思われます。しかしその散財の大きさに比べると、そのような自己獲得は本当に小さなものです。カンニャオを繰り返すごとに、その人物に対する人々の尊敬は高くなり、7 回カンニャオを繰り返した者には、紫色のターバンに似た被り物を纏うことが許され、小さな集落だけの尊敬ではなく、たくさんの周辺集落の人々の尊敬を集める長老となります。人々はことあるごとに彼の許に寄り集まり、彼の言葉を聞くようになるのです。ただ最近は、現代版の民主主義精神による選挙の悪影響がここまで及び、このカンニャオの回数が、選挙の立候補者選びにも関わるようになっていると聞いて、少なからず残念にも思います。

ともあれカンニャオには、このような側面があることを、よくよく理解しなければなりません。死者との関りのカンニャオだけではなく、至高の存在者を意識するカンニャオ、その存在者をあれこれと詮索するのではなく、唯、祝福を感じ、喜び、その祝福を他の人々にも分けようとするカンニャオです。この存在者は余りにも気高く大きく、人間の存在を遥かに超えるために、人間の側からあれこれとお願いをしたりすることも、はばかられるようです。このカンニャオで祈りが捧げられたり、御願いが持ち出されたりすることは、聞いたことがありません。ただ、この神様を感じ、意識し、この神様に恵まれ、生かされていることを、共に喜び合うのだと思われます。

イゴロットの神意識に寄り添った伝道

イゴロットの高い倫理観は、このような至高の神様の存在に対する、拭い去ることが出来ない意識がもたらすものだと、筆者は考えてきました。したがってこの意識に沿ったお付き合い、あるいは伝道の働きも試みたことがあります。ただそのような試みは、カンニャオを異教の宗教行事と理解して、偶像礼拝であると忌み嫌い、その習慣から抜け出ることが出来たことを、自分たちクリスチャン信仰の基盤であるかのように信じてきた、古い宣教師に指導されて育った、年配の牧師や信徒たちの激しい批判と、叱責を招くものであることは、容易に想像できました。そのために、私たちは、これら立派なクリスチャンたちの目が届かない、僻地の山岳地の中でも特に奥深くにある、私の持ち場であった地域で、余り波風を起こさないように、やる必要があったのです。

私たちは１日に１０時間ほども歩く、山間の部落から部落への伝道旅行の途中、時折立ち寄っては、一晩泊めてもらう家族がありました。しばらく前に、別の部落にある私たちの会衆に魅力を感じ、ほとんどクリスチャンになったつもりでいた家族です。私たちはこ

の家族を手掛かりに、この小さな集落に伝道を開始し、新たな会衆を作りたいと思っていました。それがこの家族の助けにもなると期待したのです。そこで、当時この集落の周囲、歩いて５～６時間程度の距離に散在する、１５ほどの会衆の責任を持つ二人の信徒伝道者と相談し、計画を立てることにしました。この信徒伝道者たちは、小学校も出ておらず、正式な聖書教育を得る機会もないまま、救われた喜びを近隣の人たちに伝えて、いくつもの会衆を建て上げていました。私は、彼らをそのままにしておいたならば、土地の宗教や異端の教えに影響されて、必ず道を踏み外すと考え、そのようなことが起こらないように、彼らを支援しようと、すでに１０年近くにわたって、彼らと交わりを続けていたのです。

私が強く勧めたのは、この土地の人々の神意識に沿った伝道の方法です。

「カンニャオ伝道をしよう。」
私は切り出しました。
「カンニャオ伝道って！？」
信徒伝道者たちを始め、長老たちは聞きなれない言葉に驚いていました。そこで私はイゴロットたちが信じている至高の神様、カボニャンのことを思い出させました。イゴロットたちは死者を慰めるためのカンニャオの他に、至高の神様に感謝して、この神様に喜んでもらうために行う、もう一つのカンニャオがあることを話しました。もちろん彼らはそれをすぐに理解することが出来ました。彼らの多くも、すべてのカンニャオを偶像礼拝と決めつけ、責め、排斥するクリスチャン指導者たちに疑問を感じながらも、まったく無学無力の自分たちの立場を考えて、何も言えずに来たのです。

イゴロットの多くは、気高く尊く、憐れみと恵みに満ちている、カボニヤンという神様を心の奥深いところで信じてきました。そしてこの神様を、もう一つのカンニャオで崇め、感謝を捧げてきたのです。この目に見えず、手で触れることもできず、言葉で説明しようとすることさえ畏れ多いと、ただただ崇められるだけの神様を信奉するイゴロットの信仰が、イゴロットの倫理を定め、生き方を導いている事実を説明しました。そしてイゴロットたちはこの神様について、その実、あまりよく知らないままに、崇めているだけであることもお話ししました。彼らはただ、この神様が人間を始め自然界を超越した存在であり、私たちに命を与え、生かし続けてくださるお方だと感じているにすぎません。そのお方は恵み深く、正しく、憐れみ深いものには憐れみ深くなってくださるのです。このお方が私たちの生活すべてをご覧になっておられるのだから、私たちはこのお方に喜ばれるように生きるのです。それがイゴロットを、平地に住むカトリック信徒を中心にした人々よりも、数段も高い倫理観を持たせるようになっているのです。

イゴロットは、昔からこの神様をカボニャンと呼んできましたが、これは聖書が教える

天地創造の神様と同じです。イゴロットは聖書を持たないために、自分たちの言葉でカボニャンと呼んでいますが、私たちは聖書によって、ヘブル語やギリシヤ語の名前で呼んだり、イエス様がお教えになったように、「天の父なる神様」と呼んだりしています。イゴロットが敬い崇めている神様は、実は、私たちが礼拝している神様と同じなのです。私たちは聖書によって、その神様についていろいろと教えられ、様々な知識を持っています。でもイゴロットはこの気高い神様を畏れ敬うあまり、この神様についてはあれこれと詮索せずに、ただ敬い畏れ、この神様に喜ばれようとするだけです。

私たちはイゴロットたちの神意識が作り出す、カンニャオを異教の風習、偶像礼拝と断罪し、責め立ててきました。しかしイゴロットは、微かではあるけれど、偶像礼拝に満ちている世界の中で正しい神意識を持ち続け、その神意識に沿った生き方をし、カンニャオを行ってきました。死人を恐れて行うカンニャオは、間違った世界観から来る風習です。でも、７回まで繰り返されるカンニャオは、正しい神意識と、その神様に喜ばれるように、自分の富を周囲の人々に分け与えるという、貧しい社会の中の美しくまた正しい行動なのです。

そこで私の提案は、このカボニヤンに与えられた祝福を、みんなと分け合うカンニャオを催して、あの集落の人々をお招きし、わたしたちのカボニヤン、私たちの神様、私たちの父なる神様、私たちの創造者についてお話しし、この神様は、わたしから遠く離れた神様では無く、本当はいつも近くにいて私たちを祝福し、祈りを聞き、助けを送り、作物を育て、動物を増やして下さる神様であることを、お話しするのです。

まず、豚を準備しましょう。言い出しっぺの私は、黒豚１頭と米を２袋（６０ｋｇ）献品します。あとは、クリスチャンの皆さんが神様の祝福に感謝して供出し合い、盛大なカンニャオを催しましょう。私は最初に挨拶をし、フィリピンで生活できることを喜んでいる証をします。私は次のようにお話ししたいと思います。

「私はキリストの神様を信じている、日本からの宣教師です。私は優しく親切なイゴロットの皆様の間で生活できることを、とても喜んでいます。私がイゴロットの皆様と交わり、いろいろなお話をするうちに気が付いた大切なことは、わたしが信じているキリストの神様は、イゴロットの神様、カボニャンと同じ神様であるということです。私たちは、実は、同じ神様を信じているのです。私は、イゴロットである皆さんは正しい神様を知らないから、教えてあげなければと思って、ここまでやって来たのです。でも私は今、イゴロットの皆さまは私と同じ神様を信じていると、理解することが出来たのです。

５００年ほど昔にフィリピンに来たキリスト教は、間違って、カボニャンを崇めるカン

ニャオまでも禁止したりしてしまいましたが、本当は、同じ神様を崇めている行事なのです。イゴロットの皆さまは、イゴロットの言葉でカボニャンと呼び、私たち日本人は日本語で神様と呼びます。言葉が違うだけで、同じ神様なのです。ただ、私たちは聖書という書物によって、このカボニャンについて、イゴロットの皆様より少しだけたくさんのことを知っています。そしてイゴロットの皆さんが知らない、カボニャンの祝福も沢山体験してきました。それでこれから３日間、私はここに滞在して、皆様とカンニャオを共にしたいと思います。私の神様、皆様のカボニャンが、私を祝福してくださったのですから、その祝福を皆様と分け合いたいのです。私は日本人ですから、皆様の間に長い期間留まることはできません、ですからたくさんのカンニャオを催すことはできないかもしれません。でも今回、皆さまと共に、私たちの神様の祝福を分け合って、共に喜びたいのです。

この近くの集落にある私たちの会衆も、このカンニャオに集まってくださいます。今回、私は 3 日だけしか滞在できませんが、周囲の会衆から来てくださったクリスチャンたちは、もっと長い間ここに留まり、皆様と食事を共にし、夜は焚火を囲んでコーヒーを飲みながら、皆様がカボニャンとお呼びになっている神様、クリスチャンが天のお父様と呼んでいる神様の祝福を、たくさんお話してくださるでしょう。さあ、豚も煮えています。ご飯も沢山あります。果物も、コーヒーも準備しています。みんなで一緒に食べ、神様の祝福を喜びましょう。」

実践されたカンニャオ伝道

こうして私の提案のカンニャオ伝道は、実行へ向けて動き出しました。日程を決め、供出物について大まかに話をつけ、開催場所はこの集落にある小学校を借りることにしました。この集落にはすでに小学校があったのです。特に大切なことは、各会衆にいるお年寄りのクリスチャンたちに参加してもらい、彼らに食事をしながら、またコーヒーを飲みながら、焚火を囲んで証をしてもらうことです。ここでは伝統として、お年寄りが尊敬され、若者たちはもちろん、みんながお年寄りの話を聞く習慣があるためです。お年寄りたちに、天の父なる神様と呼んできた神様の祝福について、彼ら自身の体験を通してお話ししてもらうのです。

この神様は、イゴロットが昔から崇めてきた神様と同じお方であると、話してもらうのです。ただイゴロットは、この神様があまりにも気高く尊いお方であるために、人間から遠く離れておられ、人間がこのお方にお祈りしたり、御願いをしたりすることは恐れ多いと教えられ、ほとんどあり得ないと感じてきたのです。ところが聖書という、この神様が私たちに与えて下さった書物によって、私たちは、この神様についてもっと詳しく知ることが、出来るようになりました。それによるとこの神様は確かに超絶と言う言葉があては

まるように、人間を遥かに超えた聖く、気高く、大きく、力強い神様で、この神様にできないことはなく、知らないこともありません。でも、だからと言って私たち人間は、この神様に話しかけることが出来ないのではありません。むしろこの神様は、人間たちに話しかけられ、人間たちが頼ってくることを大変喜んでくださるのです。この神様のことを私たちは聖書によって教えられ、「父なる神」とお呼びすることが多いのですが、それはこの神様が父親のようにとても優しく、人間の父親よりももっともっと私たちに気を配、いつでも助けてやろう、守ってやろう、祝福してやろう、恵みを与えてやろう準備をしておられるからなのです。

ですから、高齢のクリスチャンたちは、イゴロットがカボニャンと呼び、クリスチャンが父なる神と呼ぶ同じ神様が、いかにして自分たちの祈りに応え、守り、助け、恵み、祝福してくださったかを、自分たちの証しをしてあげればいいのです。そして彼らもまた、人間から遠く離れておられる神様にではなく、人間の近くにもいてくださり、優しい父親のように、いつでも人間を祝福しようと待ちかねておられる神様に、語りかけ、お祈りするようにお勧めしてあげればいいのです。

私たちは、予め話し合ったようにカンニャオ伝道を開始しました。朝早くから、近隣のクリスチャンたちが女子供も含めて、たくさん集まってきました。カンニャオなのです。みな、食料を携えてきました。喜んで食べ物を準備し、たくさんの人に食べてもらい、証を聞いてもらうのだという、期待に溢れていました。たちまちのうちに、屈強な若者たちが豚を何頭か屠り、大釜で似て準備をしました。ご飯も沢山炊かれました。じゃが芋を始め、いろいろな野菜が加わりました。野菜はつい最近になって道が開けると共に、たくさん作られるようになったのです。

午後遅くなって到着し始めた人たちも、随分います。１２時間も歩いてきた家族もいました。たんなるクリスチャンの親睦会ではなく、カンニャオ伝道会なのです。特に関心を高めたクリスチャンたちがいたようです。夜、かれこれ１００人を遥かに超える人々が集まりました。クリスチャンたちの数の方が多いようでした。みんな、かなり自由に夕食をし、小学校の教室を用いて、集会を始めました。この辺りは夜になると濃い霧に包まれ、かなり気温も下がるために、屋外での集会は、小規模な焚火を囲むやり方以外は不可能です。私はあらかじめ説明して置いたように挨拶をし、神様の祝福について語り、イゴロットと共に生活できることを感謝し、あとはイゴロットの伝道者と、クリスチャンたちの取しきりに任せたのです。

このカンニャオ伝道会で、一つ気になっていたことがありました。それはこの集まりが、この集落の長老に、受け入れられるかどうかです。受け入れられれば、大成功です。受け

入れられなければ、この集会の有様はさておき、この集落の伝道は前途多難となるのです。長老が受け入れてくれるかどうかは、彼がこの集まりに顔を見せるか否かにかかっています。第一日目には、現れませんでした。当然です。彼は集落の長老として、このカンニャオの様子を注意深く伺っているのです。参加した者たちの話を聞いて、判断しようとしているに違いありませんでした。２日目も、彼の姿はありませんでした。ちょっと諦めかけていた３日目の、昼食の準備をしていた時のことです。彼がやって来たのです。当時のイゴロットの長老の、正式ないで立ちで訪ねてくれたのです。彼らの伝統に従って、下はカラフルな褌、上はアメリカンと呼ばれる、背広の古着一枚です。アメリカの軍人がこの地域でフィリピン軍を最終的に打ち負かして、植民地を確立したのが１９９７年のことですから、このアメリカンという服装は、まだ１００年の伝統もないはずですが、上半身は裸だった以前の正装に比べると、確かに、温かく便利だったのでしょう。そういえば、巻きスカートだけで上半身裸だった女性の姿も、この頃はほとんど見ることが出来なくなっていました。みんな、上半身を覆う何らかの着物を着るようになっていました。近代化もゆっくりとではあっても、確実に入り込んでいたのです。

私はカンニャオの主催者として、彼に丁重に紹介され、短い会話の機会を得ることが出来ました。そこで、この集落に私を迎え入れてくれたことを感謝し、またカンニャオを行うことが出来るようにしてくれたことに、大げさにお礼を述べたのです。通訳を通して、彼は鷹揚に一言二言返し、握手の手を差しだしてくれたのです。私たちは受け入れられたのです。長老が受け入れたのは、集落が受け入れたのです。とくにこの集落では、彼に並ぶ他の長老がいなかったとのことで、信徒伝道者やクリスチャンの喜びは、並のものではありませんでした。彼がカンニャオを何回繰り返した長老であったかは、聞き逃してしまいましたが、ターバンの色から判断すると、まだ７回には至っていなかったように思えました。

私はその夜まで滞在できず、あとのことは信徒伝道者を信頼して任せ、家路についたのですが、後で聞くところによります、この伝道会を通して、新たに６家族がクリスチャンになると表明したとのことでした。改心となると一人一人の決断になるのが普通ですが、この辺りでは、まだ信仰は家族のことと捕えて、家族としてどう行動するかを決めるのが習わしでした。ですから、この小さな集落で、６家族がクリスチャンになると決めたことは、非常に大きな出来事であり、伝道としてとても大きな前進だと思いました。

さて、このカンニャオ伝道の後、ほとんど４０年も経って、私はこの集落を訪れる機会がありました。大きいとは言えないまでも、この小さな集落にしては立派な会衆が出来上がっていました。牧師は、この地域でも最も貧しい集落で生まれ育った人物で、裸で遊んでいた子供のころ、訪ねて行った私を何回も見たことがあるということでした。そして彼

の奥さんと想い出話をしているうちに、アメリカンを着た長老の段に及ぶと、彼女は突然大きな声で、「それは私の父です」と言いだしたのには、驚いてしまい、神様をほめたたえたものです。彼はその後、ただカンニャオ伝道を許しただけではなく、随分後になってからですが、家族と共にクリスチャンになる決心をしたのだそうです。

私の後悔

いま私が後悔していることは、カンニャオ伝道をしたことではありません。宣教師として、どうしてもっと現地の住民たちの生活を、学ばなかったのかということです。特に彼らの世界観、神観、人間観、そしてそれらから派生する倫理観について、どうしてもっと明確な理解を持とうとしなかったかです。そのために、私のイゴロット宣教の働きは、中途半端なものに終わって仕舞ったとも言えるのです。

私は多くの新しい感覚や方法を、イゴロットの伝道に持ち込みました。それらの多くは先輩のアメリカ人宣教師がやらなかったことであり、年配のフィリピン人牧師たちには、多分反対される方法でした。でも私は、反対を恐れずに、聖書の教えに従うという信念で、それらのことをやり通しました。そのために、年配の牧師たちとの間に、不要な軋轢を生じさせてしまったことも少なくありません。もう一つのカンニャオについての考え方も、私独自の聖書による判断であり、信念をかけての宣教論でもありました。でも結局、私はこれ以上の軋轢を避け、自分の宣教師としての立場を危うくしないために、これを公に持ち出すことも、密に調べることもせず、ただ、ほとんど秘密の内に、宣教師たちはおろか教区の指導者たちも行くことがない遠隔地で、１回だけ、カンニャオ伝道を行ったにすぎません。本当の所、当時、私の宣教師の身分は危険にさらされてもいたのです。教区の指導者たちやほかの宣教師たちに、幾度も「日本に帰れ」と言われ、そのたびに、「あなたたちの許可や認可を受けて宣教師をやっているのではない」と答えていたのです。教区に手渡した日本からの献金に対し、きちっと領収書を出し、会計報告をしてくださるように求めたときなどは、アメリカから来ていた宣教師と教区の指導者たちに、大声でどやされました。また、「日本に帰れ」です。そのようなことは多分ご存じなかった、日本の教団の理事長に、「日本からの献金は、結局どうなったの？」と尋ねられたとき、私は答えました。「きちっとした領収書と報告を、私が求め続けるようにおっしゃるならば、私が日本で働く場所を準備しておいてください。」

こういう環境の中で、私たちは新しい宣教地を求め、フィリピンの中でもまだ開発されていないところが多い、フィリピン諸島の一番西側に横たわる、細長いパラワン島を訪ね、いろいろ下調べをしたこともあります。私たちは、これ以上イゴロットの伝道はできないと踏んでいたのです。そのような事情の下にあったとしても、どうしてもっと確信を持って、理論的にも実践的にもやり遂げなかったのかと、ただただ悔やみ続けているのです。いまだに、イゴロッ

トのカンニャオは異教の祭りであり、偶像礼拝だと教え続けられているのです。偶像なるものは存在しない日本の神道が、まだまだ、偶像礼拝だと断罪され続けているのと同じです。イゴロット族のカボニヤン神にも、私の浅いまなびによれば、偶像は存在しないと思っています。

すべての異教を偶像礼拝と断罪し、責め、見下す伝道はもうやめにすべきです。神様は人間をご自分に似せてお造りになり、神様の性質を私たちに分け与えてくださったのです。その神様と共通の性質、人間の本性のゆえに、私たちは至高の方を意識する本能を持っているのです。特に、日本人もイゴロットもその至高のお方を強く意識し、基本的に偶像を持たないために、多くの偶像を礼拝する宗教文化の中に住む人々より、高い倫理観を持って生活しているのです。西欧のキリスト教にはたくさんの偶像があります。彼らの倫理観が非常に低いのには、聖書的な理由があるのです。彼らは偶像礼拝に陥っているからです。私は今でも、イゴロットの気高い宗教意識を軽く見、まじめに学ばなかったことを悔やみ続けています。

あとがき

以上の文章を書き上げたあと、私はチャット GPT を用いてイゴロットの宗教意識について、特に、カンニャオとカボニヤンについて調べてみました。私の理解とはずいぶん異なっているのに、改めで驚きました。でもそれは当然と言えば当然です。私は余り真面目に学んだのではないのですから。しかしチャット GPT の方も怪しいものです。これは現代科学の先端である AI を用いて、手に入れることが出来るあらゆる文献を集めてまとめただけのもので、集めた文献がどれほど信頼の置けるものであるかについては不確かなのです。カボニヤンについても文献は、非常に限られていて、社会学者、民俗学者、宗教学者、あるいは宣教師などの書いたものであることが、容易に想像できます。それらの文献の特徴は、西欧の学び方であり、西欧の立ち位置から観察し、西欧の物差しで測ったものだということです。イゴロット自身が書いたものではありません。日本の神道についての西欧の文献が非常に一方的で、信頼の置けないものが多いのと同じ欠点があります。日本人が書いたものでも、神道の学者が書いたものでさえも、私には「違う」と思うことが多くあります。でも、宣教師たちが神道を断罪する文献よりは、ずっと良いと思っているのです。神道に対して、私は私なりの理解を深めようと努力をしています。その基本は、人間は神様に似せて造られたという、聖書の基本に立ち返って観察することです。それが日本の宣教には不可欠だと確信しているからです。

それにしてもチャット GPT の言っていることは、カボニヤンの信仰が、聖書が教えている天地創造の神に対する信仰と、非常によく似ているということです。またカンニャオの儀式も、私たちの宣教師が教えたほど悪いものではなく、カボニヤン信仰の少々曖昧な信仰告白でもあると、考えられます。もしこれが本当ならば、私たちのイゴロットに対する伝道の方法が、全く間違っていたと判断しなければなりません。カボニヤン信仰を偶像礼拝の罪と言って排斥す

るのではなく、むしろ天地創造の神あに対する信仰へ導くものとして、大切に取り扱うべきだったのかもしれません。

ちなみに、このチャットＧＰＴの主張する教えを、以下に披露しておきます：

1. 創造主としての役割：カボニヤンは、イゴロット族にとって宇宙と世界の創造主と考えられています。彼は天と地を創り出し、人間や動植物を生み出したと信じられています。カボニヤンは宇宙の秩序を維持し、自然界の力を管理する神です。
2. 宗教的な儀式と祭り：イゴロット族はカボニヤンに感謝し、彼に祈りを捧げるためにさまざまな儀式と祭りを行います。これらの儀式は通常、農作業の季節や重要な生活の出来事に関連して行われます。農業における成功や災害からの保護を求め、カボニヤンに感謝の意を示すのが主な目的です。
3. 自然崇拝：イゴロット族は自然界を非常に重要視し、山々、川、森林などの自然の要素に神聖性を見出します。カボニヤンは自然界の力を象徴する存在としても崇拝され、自然災害や病気からの保護を願うために彼に祈ります。
4. シャーマンとの連携：カボニヤンへの祈りと儀式は、イゴロット族のシャーマンや巫女によって指導されます。彼らは神秘的な力を持ち、カボニヤンとのコミュニケーションを取り、神託を受ける役割を果たします。

カボニヤンはイゴロット族の文化と宗教において中心的な存在であり、彼を崇拝することは彼らの日常生活や農業活動に欠かせない要素です。彼らの信仰は自然環境への尊重と調和を強調し、共同体全体の結束を促進する役割も果たしています。

「カンニャオ」は、イゴロット族の祭りや祝祭りの一つを指す言葉です。この祭りは、イゴロット族の文化と伝統を祝うために行われます。以下は、カンニャオ祭りに関する詳細です：

1.　意味と目的:　カンニャオは、イゴロット族の共同体が一堂に集まり、神への感謝を表し、文化や伝統を称えるために行われる重要な祭りです。主な目的は、カボニヤンや他の神々への感謝の意を示すことであり、農業の成功や安全、健康などを祈願します。

2.　内容　カンニャオ祭りにはさまざまな儀式と催し物が含まれます。以下は一般的な内容のいくつかです：

・祈りと儀式　シャーマンや巫女がカボニヤンや他の神々への祈りや儀式を行います。これらの儀式は、神の祝福を求めるものであり、共同体全体に幸運と繁栄をもたらすと信じられています。

・文化的なパフォーマンス　カンニャオ祭りでは、伝統的な舞踏や歌が披露されます。これらのパフォーマンスは、イゴロット族の文化や歴史を称えるものであり、次世代に伝える役割を果たします。

・食事と共同体の団結　祭りの一環として、共同体全体が集まり、特別な料理や食事を楽しむことがあります。これは共同体の団結を強化し、祝祭の一体感を高めるものです。

・伝統的な衣装　参加者はしばしば伝統的な衣装を身に着け、祭りの際には装飾的な服装が見られます。これらの衣装は文化的なアイデンティティを表現し、祭りの雰囲気を盛り上げます。

カンニャオ祭りは、イゴロット族の文化と信仰における重要な要素であり、共同体の連帯感を高める機会でもあります。この祭りは、自然との調和、共同体の繁栄、文化の継承を祝う場として、長い伝統を持つ重要な行事です。